3　投票日までの選挙戦

（1）公開討論会

大統領選挙戦終盤の山場となる民主・共和両党の候補者による公開討論会は、10月6日に司会者の質問に答える1対1形式で、また同月16日に聴衆の質問に答える市民集会形式で、それぞれ90分ずつ実施された。しかし、候補者間の質問禁止という制約もありクリントン大統領のドール氏に対する10～20ポイントの大幅リードという支持率の動向に大きな影響を与えるものとはならなかった。

この討論会は、両党の代表5人ずつからなる私的団体「大統領選討論会委員会」の主催によるものであるが、同委員会は9月17日、支持率5％で低迷するペロー氏には現実的当選可能性がないとして、討論会への不招待を決定したため、選挙の行方に影響力を持つ第三党の参加は阻まれることとなった。4年前の大統領選挙で討論会を機に支持率を伸ばしたペロー氏は、この決定を「二大政党による国政独占の動き」と批判し、表現の自由侵害を理由に討論会の実施差し止めを求めワシントンDC連邦地裁に提訴したが、同地裁は10月1日、裁判所には管轄権がないとしてこれを退けた。しかし、18.9%という前回の得票実績に基づき2,920万ドルの連邦選挙資金が交付されている同氏を排除することに対しては、討論活性化の機会が失われ有権者の知る権利が奪われるとの批判もあった。

この討論会においてクリントン大統領は、4年間で1,050万人の雇用創出、5.1%という過去7年間で最低の失業率（96年8月）、3％前後の低インフレ率など、健全化した米国経済の記録を強調し有権者に支持を訴えたが、これがどの程度大統領の功績とみなされるかは異論があった。大統領側は、1993年以来の財政赤字半減が経済回復の基盤を作り、NAFTA、WTOを通じた世界市場の開放策が効果をあげたと主張するが、インフレを制御した連邦準備制度理事会、均衡予算案を主張した共和党主導連邦議会の役割や、景気循環の上昇面に巡り会わせた大統領の運の良さを強調する声もあった。一方、ドール陣営は、1993年の大統領による増税、中間層への減税公約の放棄が経済成長の鈍化を招き、実質賃金の低下と所得格差の拡大をもたらしたと指摘し、経済刺激のための所得税一律15％減税の必要性を説いている。

いずれにしても、大統領が経済を完全にコントロールできるわけではないが、その全般的な良好さが、結果的にクリントン大統領の再選に有利に働いたことは確かなようである。

4　投票結果

投票結果は前掲表1のとおり、民主党ビル・クリントン氏が一般得票率49.2%、選挙人379人を獲得し、同40.8%、159人を獲得した共和党のボブ・ドール氏を敗り、再選を果たした。FDR以来60年ぶりの民主党大統領再選という、歴史的勝利を米国の有権者はクリントンに与えたが、あわせて実施された連邦議会議員選挙の結果上・下院の多数派を従前どおり共和党がおさえたことから明らかなとおり、それはクリントンにマンデイト(権限)を与えたというより、「あと4年間、共和党と一緒に働きなさい」というメッセージを送ったものとみられている。

王制を信じないこの国では、大統領にも国王のようにふるまうことを簡単には許さない。そのため、就任後4年で、大統領をテストすることになっている（大統領選挙）。まず、世界でもっとも権力のある仕事を与える。次にその権力を有することを誇らしく思いすぎることのないように、またはその権力を維持する困難さにすてばちになることのないように、あるいは権力をどう使うかは自分のみが知るなどと思いこむことのないように要求する。そして大統領の背後で監視し、再選すべきか否かを決定することとなっているのである。

この再選のテストに合格したクリントン氏は、11月5日の晩「政治のことは脇においやり、みんなが一緒になって、アメリカの将来のために仕事をやり遂げる時が来た。」と、故郷リトルロックの古い州議会議事堂の階段で宣言した。「今晩、われわれは、アメリカの中心が活動的であり、良い状況にあることを宣言する。われわれが発展するのは共通の土壌の上である。」4年前の晩、同じ場所で開かれた集会では、聴衆はまばらで、服装もジーンズやウィンドウブレーカーなどの軽装で、流れる音楽はロックンロールのなつメロであった。それが、この日は、赤いじゅうたんの上で、紺の背広を着込んだジャーナリストを集めたプレスカンファレンスであり、流れる音楽は詰め込んで座ったオーケストラの奏でるクラシックに変わった。

もっとも歴史的なできごとは、民主党の大統領が、1936年のローズベルト大統領以来、60年ぶりに再選されたことではなく、共和党主導の議会が、1928年以来、68年ぶりに多数派を持続したことにあるといってよい。さらに、この両者が同時に起こったことは未だかつてなかったことが最も注目される。即ちこの220年というもの、民主党の大統領が、敵対する政党が議会を支配する状況の下で、再選されたことはなかったのである。

敗れたボブ・ドール氏は、投票日夜のスピーチで次のように語っている。

「ありがとうございます。私はたった今降りることを、そう、階段を降り、またエレベーターで降りていくことを考えていました。明日は、私の人生の中で、初めて、何もすることのない日になるでしょう。

しかし、私は演台から降りて、まず皆さんに感謝の言葉を述べたい。皆さんはとても一生懸命やってくれました。私はトレント（・ロット、上院院内総務）をとても誇りに思います。私たちは、上院の多数派を維持しました。下院の多数派を維持しました。

私はさっき、クリントン大統領と話をしてきました。親しく訪れ、お祝いを言ってきました。

（会場のブーイングをさえぎって）いいえ、ちょっと待ってください。私は、この選挙戦をとおして、ずっと言い続けてきました。クリントン大統領は、私の対抗者ではあるが、決して敵ではないと。そして、私は彼がよい仕事をし、アメリカをよい国にするためならば、将来にわたって、いつでも彼を助けるつもりです。なぜなら、来世紀にかけて、よりよいアメリカを建設することが、私たちの選挙戦の最初の目的であったからです。

私は、チームメイトのジャック・ケンプのことも、とても誇りに思っています。私は彼といろいろなことを話し合いました。そして彼にとても感謝しています。私が感謝しているのはジャックだけではありません。彼の妻のジョアンナは、選挙期間中、家族全員のために、すばらしい働きをしてくれました。

また明らかに、私はここにいる２人の女性に感謝しています。娘のロビンと、そして、妻のエリザベスです。妻は、この国の端から端まで、私のために旅をしてくれました。

事実、彼女たちは、選挙戦最後の96時間マラソンキャンペーンでは、ずっと一緒にいてくれました。とても貴重な時間でした。たくさんの聴衆に囲まれ、たくさんの熱狂を得ることができました。今朝の３時ごろだったと思いますが、ミズーリ州インディペンデンスという街に私たちはいました。未だかつて、私はあれほどたくさんの共和党員が、ひとつの場所に集まっているのを見たことがありません。

ひとこと、特別な言葉を言わせてください。一言、特別な言葉を、すべての若いアメリカ人のために、私の選挙戦に関係してくれたすべての若い人たちのために、言わせてください。あなたたちは、私とエリザベスにとって、ずっと、インスピレーションを与えてくれる源でした。付け加えなければなりませんが、もっと静かにしないと、税金を下げさせることなんて、決してできませんよ（注：聴衆が騒がしかったことから、ジョークを言い、大爆笑をさそった）。

若い人たちや、私の選挙戦に関係してくれた人たちは、どうか、考えてください。勝利の方が、ずっと楽しいということを。選挙に負けることは、傷つくことです。でも、これであきらめることなく、戦い続けてください。なぜなら、あなたたちが、21世紀を、次のアメリカの世紀を作っていくのですから。

私は、ここにいる誰にも、ここにいる誰にもここからいなくなってはほしくないのです。

私は、飛行機に乗って一緒に旅をしてくれた、すべてのメディアの皆さんにも感謝したい。そしてすべての友人にも感謝したい。そう、メディアの皆さんの中にも、私の友人はたくさんいます。彼等はいつでもそこにいました。毎日、夜でも、昼でも、そして飛行機で飛んでいる時にも、いつでもそこにいました。また、私たちは何百人、何千人、何千万人という人々と、アメリカ全土で、会うことができました。みんな、アメリカを良い国にすることを望み、そのために働こうとしている人々でした。

そして、私がこの会場に来て周囲を見渡したとき、私はそこで、私にとって、とても特別な人たちの顔を見ることができました。その人たちは、この10年、15年、20年、そして25年と、私を支えて続けてきてくれた人々です。私は、その皆さんが私にしてきてくれたことに対し、感謝したい。なぜなら、私は皆さんがしてきてくれたことをよく知っているからです。なぜなら、私には皆さんの援助があるから、皆さんのお蔭で私は、今なおアメリカで一番、楽天的な人間でいられるのです。

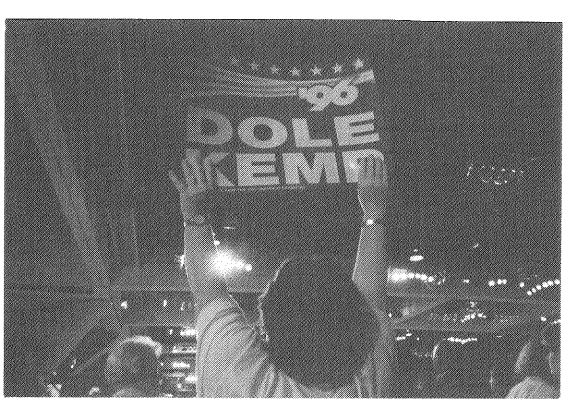
皆さんは、昼も夜も働いてくれました。皆さんは私とジャック・ケンプを信じて投票してくださいました。そのことに、いつも感謝しています。

（中略）

私が州議会の議席を初めて手にした２～３日あとで、レポーターが私の政策議題は何か、尋ねました。そのとき、私は、そうですねぇ、２～３日傍観して、周りをよく観察して、それから私の正しいと思うことに賛成の意思表示をします、と言ったのです。そして皆さんの多くは、私の将来の計画は何だろうと、ご心配なさっていることでしょう。私は、２～３日傍観して、それからアメリカと、皆さんのために、私の正しいと思うことに賛成の意思表示をするつもりです。

またお会いできることを心から強く祈って、私は皆さんすべてと、今晩お別れします。奇蹟がいつも起こり、毎日が新しい始まりで、そして生物が神の祝福を受けるこの国で、これからも何度かお会いしましょう。

私は、ここにおられるすべての皆さんに、ありがとうと言いたい。皆さんがアメリカのためにして来られたことと、今後するであろうことに、感謝します。どうもありがとう、神の御加護がアメリカにありますように。」　（1996年11月５日、ワシントンDCにて）



5　今回の選挙の特徴　－背景および結果分析－

（1）クリントン再選の理由

2年前の中間選挙における民主党の記録的大敗で、クリントン大統領の再選は一時絶望視されたが、オクラホマシティ連邦ビル爆破事件（95年5月）、共和党議会の急進的要求が招いた連邦政府機関の一部閉鎖（95年11月）は、大統領の指導力、支持率回復の転機となった。ほかに国民的人気のあるパウエル前統合参謀本部議長の出馬見送り（95年11月）は大統領にも幸いし、教育、環境、メディケアなど民主党本来の重点施策を強調しつつ、均衡財政、家族の価値重視など共和党の政策を巧みに取り入れて争点を希薄化した大統領の戦略も効を奏した。

ほかにも、好調な米国経済が現職大統領に追い風となったことが挙げられよう。ちょうど米国経済が上向きに転じた景気上昇期に当たったうえ、冷戦終結に伴う国防費の圧縮、貯蓄・貸付組合（S&L）危機の救済処理が峠を超えるなど、さまざまな追い風に助けられた面が大きい。ホワイトウォーター、FBIファイル不正入手、インドネシア財閥の献金等、一連の疑惑に関する大統領の倫理、資質批判も、好調な経済の陰に隠れる結果となった。

もう6年も続いている米国の好景気は、96年第2四半期の実質経済成長率が4.7%と依然好調なほか、失業率も96年8月時点で5.1%と89年3月以来の最低を記録した。こうした好条件を背景にニューヨーク株式市場のダウ工業平均株価は、96年10月14日、史上初めて終値が6千ドルを突破、その後最高値を更新し続けたことは、クリントン大統領にとって、再選に向けた願ってもない追い風となった。好景気がすべてクリントン大統領の手腕によるものではないにしろ、国のリーダーたる大統領をわざわざ取り換える必要はない、と国民が判断したのも無理はないかもしれない。

（2）米指導者の世代交代

今回の大統領選挙では、クリントン大統領が「21世紀への橋を架けよう（Building a bridge to the 21st century）」と未来への希望を強調したのに対し、ドール氏は「アメリカン・ドリームの再現（Restoring the American Dream）」と、過去の栄光を語り、伝統的価値観の再興を訴えた。

ドール氏は8月中旬にカリフォルニア州サンディエゴで開かれた共和党全国大会で、「私はかつての米国を見ている。平和で誠実で自信に満ちた時代への橋渡し役をやらせてほしい」と「強いアメリカ」の復活を強調し、「米国の歴史を築いた伝統を捨ててはならない。信仰や家族の価値といったこれまでの蓄積を崩してはならない」と、伝統的価値の再興を訴えた。

これに対し、クリントン大統領は同月末にイリノイ州シカゴで開かれた民主党大会で、前記のとおり「今夜、21世紀への懸け橋を建設することを決意しよう。数々の挑戦をし、基本となる価値を守り、わが国民の未来に備えよう」との指名受諾演説を行った。クリントン自らが「この選挙は過去への懸け橋か、未来への懸け橋かを問う選択だ」と述べたよ

うに、両者の最大の相違点は「過去」か「未来」のどちらを選択するかにあるかの如く受け止められてしまった観があり、その意味ではドール氏の共和党陣営は基本戦略を誤った節もある。

ドール氏の敗北は米指導者の完全な世代交代を意味するが、第二次世界大戦の英雄であるドール氏と、戦後生まれのベビーブーム世代であるクリントン大統領との戦いを通して、米国民は改めて今世紀の国の足跡を振り返ることにもなった。それは国民教育のまたとない機会であり、選挙の勝敗如何だけではないことを国民に教えたといえる。

ドール氏の経歴は米国の20世紀史そのものである。カンザス州ラッセルという人口5千人の田舎町に生まれ育ち、大戦中にイタリア戦線で重傷を負って右手の自由を失い、政府奨学金を得て苦学の末、政治家の道をたどった過去を持つ。米国では選挙の際、高い税金、規制緩和、福祉の行き過ぎなど、政府の大きな役割が論点になり、かつドール氏の所属する共和党の基本政策は「小さな政府」であるが、ドール氏自身のこうした経歴は、供給者重視の経済政策より、財政均衡を重視する立場となって表れ、無駄のない福祉や奨学制度の重要性を訴える立場であったはずであるが、今回の選挙ではリベラルの呼称を嫌ったクリントン大統領の中道路線に論点の相違がぼかされ、最後まで浮揚することはできなかった。しかし、第二次世界大戦世代最後の大統領選挑戦者となるであろうドール氏が、「私は進歩を信じた米国の過去の栄光を知る者だ」と訴える姿には、米国政治指導者の志の高さを感じさせるものがあった。

（3）パウエル氏の不出馬

今回の大統領選挙立候補予定者のうち最も国民に人気が高く、その去就が注目されていたコリン・パウエル前統合参謀本部議長は、1995年11月8日、不出馬の意向を表明した。同氏は、ジャマイカ系移民の二世として、ニューヨークのブロンクスで、米国の黒人にしては珍しく、父親が常に職業を持ち、両親が離婚しない家庭に育ち、大学では予備役将校訓練部を経て軍人になり、軍隊と軍事行政部門とを往復するうちに、ついに軍人として最高の階級にのぼりつめた人物である。

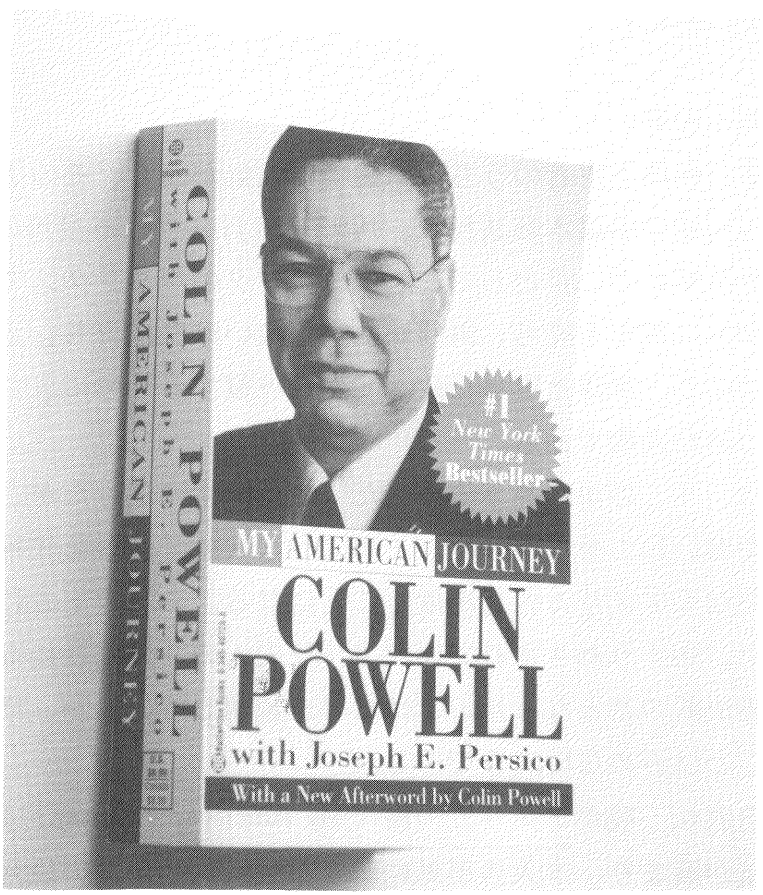
記者会見で同氏は、「この決断を下すに当たっては非常に迷ったが、ホワイトハウスを目指すための熱情を奮い起こせなかった。このような状態で大統領候補に名乗りを上げることは、自分だけでなくアメリカ国民を欺くことになる。これ以上先に行くことは控えたい」と心境を述べた。広くうわさされていたアルマ夫人の「候補者になった場合の安全性への懸念」が不出馬決断の基となった訳ではないと説明しているが、同夫人の意見が実質的な要因となったことは否めないようである。

同年9月15日に自叙伝「我がアメリカの旅（My American Journey）」を出版して以来、以前にもまして人気が高まり、本人の出馬に関する公式声明がない段階での世論調査で、「もしも今日が大統領選挙の投票日だったら、あなたは誰に投票しますか」との質問に対し、クリントン大統領との二者択一で39％対54％と15％も高い支持率を獲得し、共和党

のボブ・ドール氏との三つ巴でも、クリントン大統領に並ぶ31％を獲得する勢いを見せたことからもわかるように、不出馬表明直前まで世論調査は、同氏に唯一現職のクリントン大統領と互角もしくはそれ以上に戦える人物としての評価を与えていただけに、今回の不出馬表明を惜しむ声は強かった。民主・共和両党の二大政党による現状に飽きたらず、国政に変化を求める選挙民の声が強い中で、財政保守主義、社会政策中道主義を標榜する同氏に無党派層のみならず、共和党支持者等からも不出馬表明後もなおかつぎ出しを狙うグループがあったほどである。

共和党の指名を獲得したドール氏やその他の候補にとって、パウエル不出馬は追い風となり、特にドール氏はパウエル不出馬表明直後に、他州の動向に影響を与えると言われているニューハンプシャー州のスティーブン・メリル知事の支援約束の取り付けに成功するなど、地歩を強固にした。他方、クリントン大統領にとっても、民主党がこれまで当選の拠り所としていた黒人票を奪われるおそれがなくなり、これを歓迎した。

選択肢の減った選挙民の側からすると、「悪い職業政治家の中で、どちらがましか」という従来どおりの構図の中での選択を迫られるため、選挙に対する無関心の高まりが懸念され、そうした状況に満足しえないグループによる第三党結成の動きもあったが、世論の主流とはなりえず、これらが49％という史上最低の投票率の一因ともなったものとみられている。



コリン・パウエル氏の「My American Journey」

6　今後の展望

（1）閣僚人事

クリントン大統領の再選を受けて、政権二期目の閣僚人事は大幅に刷新された。国務長官のウォーレン・クリストファー氏が辞任し、後任には米国史上最高位の女性高官として、前国連大使のマデリーン・オールブライト氏(59）が指名された。また、ウィリアム・ペリー国防長官の後任には、共和党から前上院議員で穏健派のウィリアム・コーエン氏（56）が指名されたほか、ミッキー・カンター商務長官の後任に、伝説的なシカゴ市長リチャード・デイリー氏の子どもで、現シカゴ市長のリチャード・デイリー氏の弟でもあるウィリアム・マイケル・デイリー氏が指名された。

留任した主要な閣僚としては、ジャネット・リーノ司法長官、ロバート・ルービン財務長官などが上げられる。

（2）政策課題

クリントン政権の二期目には、内政面で難題が待ち受けている。特に、政策論で、高齢者医療保険（メディケア）と社会保障の財源問題、さらに、財政均衡の達成など、一期目からの継続課題については、議会で多数派を占める共和党との対立が予想されるが、円滑な政権運営のためには、今後は議会と交渉や妥協を重ねていく必要があろう。

昨年の大統領教書で「大きな政府の時代は終わった」と述べ、政府の規模をめぐるイデオロギー論争に終止符はうったものの、大きな政府を小さくするための実質的な努力が十分とはいえず、財政均衡実現のための政策論で民主・共和両党間の対立は依然根深いものがある。メディケアや社会保障の財源論争もその対立に根差している。

また、ホワイトウォーター疑惑など、クリントン大統領の一連のスキャンダルに対する追及は、今後さらに強まることが予想されるほか、外国からの民主党への献金疑惑など、ホワイトハウスは今後、議会による疑惑の全面追及に直面することになりそうである。

外交面では、今後は中国、ロシアなど大国との関係調整が重要課題になる。米中両国はすでに首脳の相互訪問を合意しており、クリントン大統領の訪中は97年中か98年には実現するといわれているが、米政府は中国の人権状況を重視する姿勢を崩しておらず、この問題で中国側に改善が見られなければ関係の完全修復は難しいであろう。

また、対ロシア政策では、北大西洋条約機構（NATO）の東方拡大に向けたロシア説得が最大の焦点になる。新任のオールブライト国務長官は、上院外交委員会の指名承認演説で、欧州を最重要視する姿勢を見せ、NATO拡大、ロシアとの連携、ボスニア・ヘルツェゴビナの和平確保など、欧州における課題を強調した。

III　連邦上下院議員選挙

1　選挙結果（上院）

上院議員選挙の結果を州ごとにまとめたものが、表４であり、網かけ表示となっている欄内の候補者が当選者である。

今回争われた34議席のうち、引退、予備選の敗退、他への転身等の理由から現職議員が立候補しなかった「open seat（空白区）」は、同表に示されたとおり、民主党８議席、共和党６議席、計14議席であったが、そのうち、共和党は自党の６議席をそのまま維持するとともに、民主党の３議席を奪回した。

現職議員（＊印）が立候補した20議席については、民主党は７人の現職すべてが再選を果たしたが、共和党は13人の現職のうち、サウスダコタ州で現職議員が破れ、民主党に議席を奪われるという波乱があった。この結果、共和党の議席増は２となった。

改選後の全上院議席

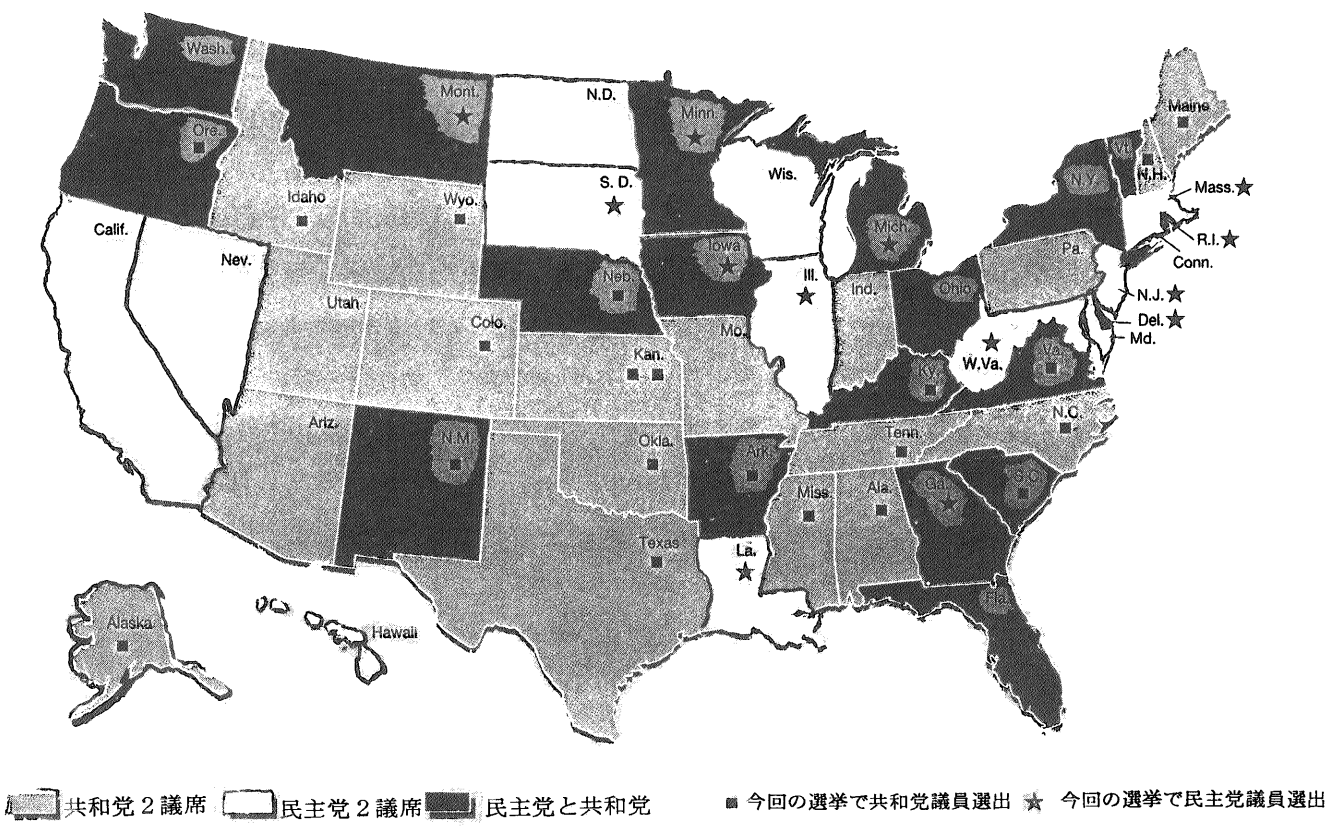


表４：連邦上院議員選挙結果一覧

州　名	open seat	gain	候　補　者					
			民主党	%	共和党	%	独立系	%
Alabama	D	R	Roger Bedford	45.7	Jeff Sessions	51.9	Mark Thornton	1.8
Alaska			>Theresa Obermeyer	10.0	*Ted Stevens	77.4	Jed Whittaker	12.5
Arkansas	D	R	Winston Bryant	47.3	Tim Hutchinson	52.7		
Colorado	R		Tom Strickland	46.3	Wayne Allard	50.7	Randy MacKenzie	3.0
Delaware			*Joseph Biden	60.0	Ray Clatworthy	38.1	Mark Jones	1.2
Georgia	D		Max Cleland	48.8	Guy Millner	47.6	John Cashin	3.6
Idaho			Walt Minnick	39.9	*Larry Craig	57.0	>Mary Charbonneau	2.0
Illinois	D		Richard Durbin	55.8	Al Salvi	41.0	Steven Perry	1.4
Iowa			*Tom Harkin	51.8	Jim Lightfoot	46.8	>Sue Atkinson	0.8
Kansas (Full Term)	R		>Sally Thompson	34.4	Pat Roberts	62.0	Mark Marney	2.3
Kansas (Short Term)	R		>Jill Docking	43.3	Sam Brownback	53.9	Donald Klaasen	2.7
Kentucky			Steven Beshear	42.9	*Mitch McConnell	55.4	Dennis Lacey	0.7
Louisiana	D		>Mary Landrieu	50.4	Woody Jenkins	49.6		
Maine	R		Joseph Brennan	43.9	>Susan Collins	49.2	John Rensenbrink	3.8
Massachusetts			*John Kerry	52.2	William Weld	44.8	>Susan Gallagher	2.7
Michigan			*Carl Levin	58.3	Ronna Romney	39.9	Kenneth Proctor	1.0
Minnesota			*Paul Wellstone	50.4	Rudy Boschwitz	41.3	Dean Barkley	7.0
Mississippi			James Hunt	27.3	*Thad Cochran	71.2	Ted Weill	1.6
Montana			*Max Baucus	49.5	Dennis Rehberg	44.7	>Becky Shaw	4.7
Nebraska	D	R	Ben Nelson	41.7	Chuck Hagel	56.2	John DeCamp	1.4
New Hampshire			Dick Swett	46.3	*Robert Smith	49.4	Ken Blevens	4.4
New Jersey	D		Robert Torricelli	52.5	Dick Zimmer	42.6	Richard Pezzullo	1.8
New Mexico			Art Trujillo	30.1	*Pete Domenici	64.3	Abraham Gutmann	4.4
North Carolina			Harvey Gantt	45.9	*Jesse Helms	52.6	Ray Ubinger	1.0
Oklahoma			Jim Boren	40.1	*James Inhofe	56.7	Bill Maguire	1.3
Oregon	R		Tom Bruggere	46.5	Gordon Smith	48.9	Brent Thompson	1.6
Rhode Island	D		Jack Reed	63.1	>Nancy Mayer	35.3	Donald Lovejoy	1.5
South Carolina			Elliot Close	44.1	*Strom Thurmond	53.3	Richard Quillian	1.1
South Dakota		D	Tim Johnson	51.3	*Larry Pressler	48.7		
Tennessee			Houston Gordon	36.8	*Fred Thompson	61.4	John Hooker	0.8
Texas			Victor Morales	43.9	*Phil Gramm	54.8	Michael Bird	0.9
Virginia			Mark Warner	47.3	*John Warner	52.7		
West Virginia			*John Rockfeller	76.7	>Betty Burks	23.3		
Wyoming	R		>Kathy Karpan	42.2	Mike Enzi	54.1	David Herbert	2.5
計34			当選者計13名		当選者計21名		当選者なし	

1　D,Rはそれぞれ民主党、共和党を示す。「open seat」欄はその政党の現職が立候補しなかった空白区の州を示し、「gain」欄は、その政党が他党から議席を奪った州を示す。

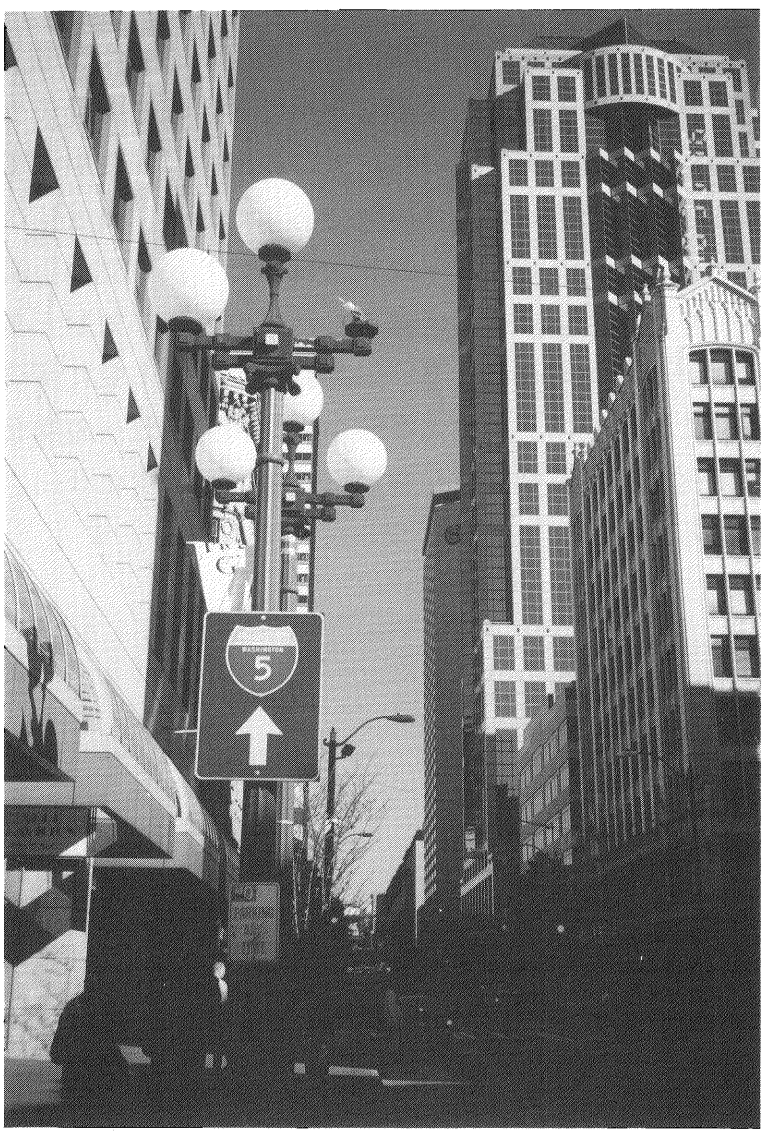
2　候補者中、*印は現職、>印は女性、網掛けのものは当選者を示す。

3　開票率99～100%。この表に示されない独立系の候補者もいるので、得票率の合計は必ずしも100%とはならない。

表５：連邦上院議員一覧

州　名	民主党		共和党	
Alabama			#‡Jeff Sessions	Richard Shelby
Alaska			Ted Stevens	Frank Murkowski
Arizona			John McCain	Jon Kyl
Arkansas	Dale Bumpers		#‡Tim Hutchinson	
California	>Dianne Feinstein	>Barbara Boxer		
Colorado			#Wayne Allard	Ben Campbell
Connecticut	Christopher Dodd	Joseph Lieberman		
Delaware	Joseph Biden		William Roth	
Florida	Bob Graham		Connie Mack	
Georgia	#Max Cleland		Paul Coverdell	
Hawaii	Daniel Inouye	Daniel Akaka		
Idaho			Larry Craig	Dirk Kempthorne
Illinois	#Richard Durbin	>Carol Moseley-Braun		
Indiana			Richard Lugar	Daniel Coats
Iowa	Tom Harkin		Charles Grassley	
Kansas			#Pat Roberts	#Sam Brownback
Kentucky	Wendell Ford		Mitch McConnell	
Louisiana	#>Mary Landrieu	John Breaux		
Maine			#>Susan Collins	>Olympia Snowe
Maryland	Paul Sarbanes	>Barbara Mikulski		
Massachusetts	John Kerry	Edward Kennedy		
Michigan	Carl Levin		Spencer Abraham	
Minnesota	Paul Wellstone		Rod Grams	
Mississippi			Thad Cochran	Trent Lott
Missouri			Christopher Bond	John Ashcroft
Montana	Max Baucus		Conard Burns	
Nebraska	Bob Kerrey		#‡Chuck Hagel	
Nevada	Harry Reid	Richard Bryan		
New Hampshire			Robert Smith	Judd Gregg
New Jersey	#Robert Torricelli	Frank Lautenberg		
New Mexico	Jeff Bingaman		Pete Domenici	
New York	Daniel Moynihan		Alfonse D'Amato	
North Carolina	Lauch Faircloth		Jesse Helms	
North Dakota	Kent Conrad	Byron Dorgan		
Ohio	John Glenn		Mike DeWine	
Oklahoma			James Inhofe	Don Nickles
Oregon	Ron Wyden		#Gordon Smith	
Pennsylvania			Arlen Specter	Rick Santorum
Rhode Island	#Jack Reed		John Chafee	
South Carolina	Ernest Hollings		Strom Thurmond	
South Dakota	#‡Tim Johnson	Tom Daschle		
Tennessee			Fred Thompson	Bill Frist
Texas			Phil Gramm	>Kay Hutchison
Utah			Orrin Hatch	Robert Bennett
Vermont	Patrick Leahy		James Jeffords	
Virginia	Charles Robb		John Warner	
Washington	>Patty Murray		Slade Gorton	
West Virginia	John Rockfeller	Robert Byrd		
Wisconsin	Herb Kohl	Russell Feingold		
Wyoming			#Mike Enzi	Craig Thomas
	45		55	

1　#印は新人、>印は女性を示す。
2　今回の選挙で、‡印は他党から議席を奪った者、網掛けは当選者を示す。



シアトル

2　選挙結果（下院）

下院議員選挙の結果を州ごとにまとめたものが、表６である。

クリントン大統領の優勢に引きずられて、民主党の２年前の歴史的敗北をくつがえす逆転も予想されたが、共和党が227対207（独立系１）と、かろうじて主導権を維持した。議席数の差は38から20に縮小し、民主党の207議席は、過去40年以上で最も数の多い少数派である。

州ごとの議席数の増減をみると、議席数の変動のあった22州のうち、民主党が議席を増加させた州が13、共和党が同じく９となっている。連邦国勢調査局の分類による四つの地方別でみると、民主党対共和党の議席数は、北東部９州で53対34（改選前47対40）、南部16州で61対88（同66対83）、中西部12州で50対55（同46対59）、西部13州で43対50（同39対54）となり、北東部以外の三地方において共和党が民主党を総議席数で上回る構図は持続された。

次に、同一政党による州別の過半数占有の状況をみると（表４中で議席数が網かけ表示となっているものが、その州選出の下院議員の過半数を当該党が占めていることを表わす）、民主党18（改選前17）、共和党27（同26）、両党同数または独立系４（同６）となっており、民主党が５州で過半数を制するも４州で過半数占有を失う一方、共和党は４州で過半数を制し３州で過半数占有を失った。人口の多い（したがって定数が多い）三大州では、最大州のカリフォルニア州で両党同数であったのが、民主党が２議席増やして28対24と多数を奪還したほか、ニューヨーク州ではやはり民主党が１議席増やして多数を持続し、テキサス州でも民主党は２議席減らしたものの、16対14と多数を持続した。

なお、議席数の変動があった22州のうち、過半数を占有する党に変化があったのは10州（＊印）であるが、その内訳は、民主党多数から共和党多数への変化４州、共和党多数から民主党多数への変化２州、議席同数から民主党多数への変化３州、共和党多数から議席同数への変化１である。

ロサンゼルス

表６：連邦下院議員一覧

州名	計	民主党 選挙 前	民主党 選挙 後	民主党 増減	共和党 選挙 前	共和党 選挙 後	共和党 増減
*Alabama	7	4	2	-2	3	5	2
Alaska	1	0	0	0	1	1	0
Arizona	6	1	1	0	5	5	0
Arkansas	4	2	2	0	2	2	0
*California	52	26	28	2	26	24	-2
Colorado	6	2	2	0	4	4	0
*Connecticut	6	3	4	1	3	2	-1
Delaware	1	0	0	0	1	1	0
Florida	23	8	8	0	15	15	0
Georgia	11	3	3	0	8	8	0
Hawaii	2	2	2	0	0	0	0
Idaho	2	0	0	0	2	2	0
Illinois	20	10	10	0	10	10	0
Indiana	10	4	4	0	6	6	0
Iowa	5	0	1	1	5	4	-1
Kansas	4	0	0	0	4	4	0
Kentucky	6	2	1	-1	4	5	1
Louisiana	7	2	2	0	5	5	0
*Maine	2	1	2	1	1	0	-1
Maryland	8	4	4	0	4	4	0
Massachusetts	10	8	10	2	2	0	-2
Michigan	16	9	10	1	7	6	-1
Minnesota	8	6	6	0	2	2	0
*Mississippi	5	3	2	-1	2	3	1
Missouri	9	6	5	-1	3	4	1
*Montana	1	1	0	-1	0	1	1
Nebraska	3	0	0	0	3	3	0
Nevada	2	0	0	0	2	2	0
New Hampshire	2	0	0	0	2	2	0
New Jersey	13	5	6	1	8	7	-1
New Mexico	3	1	1	0	2	2	0
New York	31	17	18	1	14	13	-1
*North Carolina	12	4	6	2	8	6	-2
North Dakota	1	1	1	0	0	0	0
Ohio	19	6	8	2	13	11	-2
Oklahoma	6	1	0	-1	5	6	1
Oregon	5	3	4	1	2	1	-1
Pennsylvania	21	11	11	0	10	10	0
Rhode Island	2	2	2	0	0	0	0
South Carolina	6	2	2	0	4	4	0
*South Dakota	1	1	0	-1	0	1	1
Tennessee	9	4	4	0	5	5	0
Texas	30	18	16	-2	12	14	2
Utah	3	1	0	-1	2	3	1
Vermont	1	independent1			independent1		
Virginia	11	6	6	0	5	5	0
*Washington	9	2	5	3	7	4	-3
West Virginia	3	3	3	0	0	0	0
*Wisconsin	9	3	5	2	6	4	-2
Wyoming	1	0	0	0	1	1	0
合計	435	198	207	9	236	227	-9
		independent1			independent1		

1 数字は 議席数を表わす。

2 数字のうち、網かけ表示のものは、その政党がその州内の議席の過半数を占めていることを示す。

3 州名に*印のついているものは、過半数を占める政党が選挙前後で変わったことを示す。

4 Vermont州の議席は、独立系のものである。

3　注目を集めた選挙戦

（1）マサチューセッツ州（上院）

現職上院議員のジョン・ケリー氏（民主党）と、同じく現職のマサチューセッツ州知事であるウィリアム・ウェルド氏（共和党）との選挙戦は、今回の全米中の選挙戦で最高かつ最も輝いていたものであったろう。

ケリー氏は、同じ州の先輩上院議員であるエドワード・M・ケネディ氏（民主党）の影に隠れがちであったが、ウェルド氏との８回にも及ぶ討論会を通して、マサチューセッツ州の経済再生のために、両者の知性と献身が必要であり、ともにふさわしい同僚であることを証明した。同州の元上院議員であるポール・ソンガス氏は、「ウェルド氏はマサチューセッツ州のためにすばらしい貢献をしたという意見がある。私もその考えに同感だ。もしウェルド氏がすばらしく、ケリー氏もすばらしいのなら、二人ともそのままで良いではないか？」と述べているが、これが同州の有権者の出した答えのようである。

結局、ケリー氏が19万票弱の差をつけてウェルド氏の挑戦を退け、ウェルド氏は引き続き知事職を務めることとなった。なお、マサチューセッツ州では知事の任期制限は1988年の選挙から２期12年となるが、現在２期目のウェルド知事はこの任期制限ができた際の現職知事であるため、制度的にはもう一期知事を務めることが認められている。

（2）サウスカロライナ州（上院）

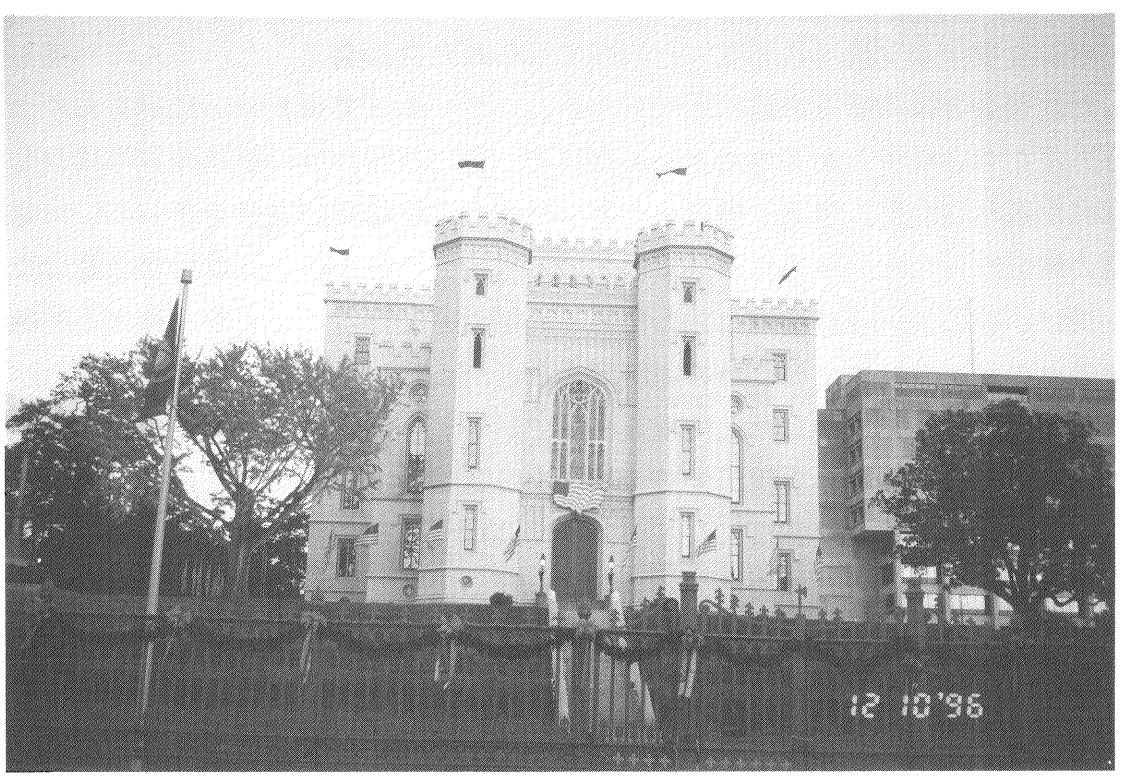
ストローム・サーモンド上院議員（共和党）にとって、1969年に議会を引退した、アリゾナ州選出のカール・ハイデン元上院議員の持つ41年10か月と11日間という議会在職最長記録を破るためには、あとわずか７か月間上院議員を務めるだけであった。そして、今回の選挙で挑戦者のエリオット・クローズ氏（民主党）を退けたことで、この93歳の上院軍事委員長の記録達成は確実なものとなった。

織物業の相続者で、不動産開発業者でもあるが、表立った政治経験のまったくない43歳のクローズ氏にとって、サウスカロライナ州に君臨する共和党員であるサーモンド上院議員に太刀打ちできる余地はまったくなかったといってよいであろう。投票直前にクローズ氏が集中的に流した、サーモンド上院議員を中傷するネガティヴなテレビ広告も、差を10万票にまで縮めるのが精一杯であった。

サウスカロライナ州の有権者の多くは、サーモンド上院議員が今回の選挙には出ないだろうと考えていたが、しかしその人気はすばらしいものであった。気さくな人柄で、大規模なショッピングセンターやファミリーレストンなどに現われて気取らない選挙戦をしたり、自らのことを映画「ターミネーター」に掛けて「サーモンデーター」と呼んだ（この映画では主人公の「また来る（I' ll be back）」というセリフが有名になったが、何回も再選を重ねる自分をターミネーターに重ね合せた、自分も再び議会に戻ってくるというメッセージである）。この州は国内でもっとも伝統を重んじる州であり、人々をお払箱にする歴史はない、という政治学者の言葉が印象的である。

（3）ルイジアナ州（上院）

退潮傾向にある自分たちの暗い未来を変えたいと思う南部の民主党員は、女性候補のメアリー・ランドリュー氏（40、民主党）のルイジアナ州での勝利から学ぶことが多くあるだろう。州上院議員のルイス・“ウッディ”・ジェンキンス氏（共和党）を破ったランドリュー氏は、イデオロギー論争を通して中道的有権者の心を攻撃的につかまえることに成功した。彼女は、女性や子供の立場に立った州議会での活躍や、またメディケアへの確固とした支持を表明することで、自分の所属する党のリベラルな立場を再認識させながらも、減税や財政均衡を訴えることで保守層にも食い込むことができたのである。また、ジェンキンス氏を過激論者と攻撃するときに、彼の当選後の世界を「ウッディの世界」と名付け、恐ろしい世界であるとのイメージを喧伝した。そこでは人工妊娠中絶の権利は奪われ、強襲武器がたくさん生産され、そしてジェンキンス氏の主要政策を取り上げ、所得税が累退的売上税に取って替わられると訴えた。ジェンキンス氏は、「押し込み強盗銃撃」法（“shoot-the-burglar” act）の成立に貢献し州議会で名を揚げたが、人工妊娠中絶の論議の場にプラスチック性の胎児の模型を持ち込むほどの過激な保守派で、自らの保守的な考えを少しも和らげる気はなかった。彼は、州内の共和党支持者の増加という政治的潮流と、キリスト教連合や全米銃器所有者の会といった保守的な団体の強力な支持によって、選挙で勝利できると信じていた。ランドリュー氏の勝利は、ルイジアナのような非常に保守的な州でも、政治的な中道層は確かに存在することを証明したといえる。



旧ルイジアナ州議会議事堂（バトンルージュ）

（4）ジョージア州（上院）

サム・ナン上院議員（民主党）の引退した空席を誰が埋めるか決めるに当たって、ジョージア州の有権者は、ボブ・ドール氏に似た候補と、その過去の経歴がボブ・ドール氏を思い出させる候補との選択をせまられた。

その後者であるマックス・クリランド氏（民主党）は、手りゅう弾の爆発で両足と片腕を失い、その後は公共への奉仕によって人生を立て直したヴェトナム戦争の英雄である。落選したガイ・ミルナー氏（共和党）の広報担当者は、クリランド氏（54）の選挙運動は、自身の一代記を宣伝したものだと選挙期間中不平を訴えた。しかし、それは注目すべき一代記であった。三箇所にわたる切断手術に耐え、失意と偏見に打ち勝ち、ジョージア州上院議員になり、カーター大統領の下で連邦政府復員軍人庁の長官を務め、そしてジョージア州州務長官を三期にわたり務めたのである。

裕福な実業家で、ボブ・ドール氏の弟だといっても通りそうな容貌のミルナー氏は、選挙期間中クリランド氏にリベラルとのレッテルを張るため、同氏より２百万ドル以上多い資金を使った。しかし、クリランド氏は注意深くクリントン大統領と距離を置き、「思慮ある中道へ身を置け」との自らによる忠告に従った。この包容力の大きなアピールと、英雄的な経歴とが相まって、1988年以来南部の民主党候補者が空席の出た選挙で勝ったためしのないという事実にもかかわらず、彼の勝利は不動のものとなった。

（5）ミネソタ州（上院）

ポール・ウェルストーン上院議員（民主党）と、６年前の選挙でそのウェルストーン氏に敗れ、当時の現職上院議員で唯一議席を維持できなかったという汚名を着せられたルーディ・ボシュウィッツ氏（共和党）との間で行われた討論会は、たいへんに白熱したものとなった。司会者は両者を冷静にさせるため、（サーカスで調教師が猛獣をあやつるときに使う）「むちと椅子」が必要だと叫んだほど、特に連邦政府の農業政策等に対して白熱した意見が戦わされた。事実、両者はミネソタ州の上院議員の議席を争って、凶暴な戦いを公開の席で行ったといっても過言ではない。討論会の最後に、元政治学教授のウェルストーン氏は、彼の1990年の勝利は決してまぐれ当たりではなく、また、連邦上院議会にも時代遅れのリベラリストのための場所はあると訴えた。彼は先の第104議会で成立した福祉改革法案に反対票を投じた上院議員の中で唯一、今回の選挙で改選を迎えた現職議員であり、そのため共和党の攻撃広告で「福祉上院議員」とのあだ名をつけられた。ウェルストーン氏は、自分が上院議員になる前に二期続けて同州の共和党上院議員を務めたボシュウィッツ氏のことを、最低賃金の値上げに反対の投票をし、上院議員給与の値上げには賛成の投票をした、特定の利益集団の操り人形であると攻撃した。彼は議会の倫理基準をさらに厳しく改革するように求めており、つまり、選挙民の同意さえ得られれば、同僚を攻撃することなどなんでもないのであろう。また、そうした自分自身の評判を変えようとする気もまったっくないようである。「それが私の履歴である。そしてこの熱意がミネソ

タの伝統である。それを進歩的とも、リベラルとも、好きに呼ぶがいい。」こう言う彼は、投票日の晩に、勝利を迎えることとなった。

（6）サウスダコタ州（上院）

ラリー・プレスラー（前）上院議員（共和党）が、自分の選挙区の有権者に好んで見せて自慢していた、1928年製のジョン・ディアー社のトラクターは、ついにガス欠で止まってしまったようである。1978年以来今回の選挙まで、ずっと上院の議席を維持してきたこの共和党員も、人気があり、同州で唯一の連邦下院議員であるティム・ジョンソン氏（民主党）に敗れることとなった。プレスラー氏は、ローズ奨学生であり、上院議員になった最初のヴェトナム帰還兵であったが、ついに自分の議席を常に保証されたものにすることはできなかった。（「上院議員の席は無駄にしておくにはもったいない」と、同州選出のトム・ダッシェル上院議員（民主党、少数派院内総務）は、かつて彼のことを評したことがある。もちろんこれは、「心は無駄にしておくにはもったいない（A mind is a terrible thing to waste.）」という格言をもじったものである。）プレスラー氏の強味は、かつてフンボルト譲りの忠実なしもべというイメージにあったが、彼にはジョンソン氏という、州内の農業、水道事業、高速道路、またはインディアン居留地などに隠然たる影響力を持ち、下院議員を5期務めた侮れない強敵がいたのである。プレスラー氏が1996年初めに情報通信産業の規制緩和法案に賛成したことは、法案の成立後に市内通話料金が値上がりする前であっても、彼の友人たちを家に帰すことをさまたげた。そして、ジョンソン氏はその法案に反対票を投じている。2年前、プレスラー氏が公共放送局（PBS）を民営化させようとしたとき、「PBSを維持し、プレスラーを民営化しよう」という自動車のバンパー用のステッカーが流行したが、そのステッカーが現実のものとなったのである。

（7）ニュージャージー州（上院）

「もうたくさんだ。」ニュージャージー州内に三つある地元新聞の一つであるリコード紙は、同州の上院議員候補両名の支持をどちらも拒否して、このように宣言した（米国では、新聞社が社説等で支持する候補者を明示することはごく普通である）。他の新聞は、「この醜い争いが終われば、きっとほっとするだろう」と書いた。ビル・ブラッドレー前上院議員（民主党）の引退した空席をめぐる戦いは、実際、今回の選挙を通じて最も胸が悪くなるようなひどい戦いであり、その血生臭い戦いは最後まで続いた。また、投じられた選挙資金は両者を合計すると千5百万ドルを超える、最も金のかかった選挙でもあった。しかし、下院議員を7期務めたロバート・トリセリ氏（45、民主党）は、人生で一度も落選したことがなく、今回もそのとおりであった。彼は、小学校時代から選挙に出ていた人間である。また、CIAのグァテマラとの関係を暴露したり、ビアンカ・ジャガー（ロックンロールのスーパースターである、ローリングストーンズのミック・ジャガーの元夫人）との2年越しの愛の終結などで、全米の話題をさらい、新聞の見出しを飾るような名

声を得た。しかし彼は、財政的保守派かつ社会的穏健派で、6年間下院議員を務めた対抗馬のリチャード・ジマー氏（52、共和党）を、どぎつい保守派で、安全保障政策を台なしにし、環境保護主義を裏切り、銃器ロビイストに卑屈に追従する人間であると攻撃し、そしてクリントン大統領を、選挙戦終了直前の週末の最後の決戦のときにニュージャージーに着陸させることで、大統領のコートのうしろをがっしりとつかんで勝利を得たのである。（コートのうしろ、つまりコートテイル効果とは、強力な候補者の影響力で、力の弱い候補者もいっしょに当選することをいう。）

（8）ノースカロライナ州（上院）

ハーヴェイ・ガント氏（民主党、53）の討論会開催の申し出をすべて断わり、聴衆の大歓迎を受ける討論会より、テレビ広告による選挙戦に頼ったジェシー・ヘルムズ上院議員（共和党、75）であったが、有権者はヘルムズ氏に5期目を務めさせることを選んだ。シャーロットで最初のアフリカ系アメリカ人市長であったガント氏との1990年に引き続いての対決は、前回の10万票差が、今回は17万票差にひらいたものの、きわどい勝利であったことには変わりはない。

（9）アーカンソー州（上院）

クリントン大統領の出身州では、初の共和党上院議員が誕生した。ティム・ハッチソン氏（47、共和党）は、引退したデイビッド・プライアー氏（民主党）の空席をめぐって、州司法長官のウィンストン・ブライアント氏（民主党）に競り勝った。

アーカンソー州では、知事であったジム・ガイ・タッカー氏（民主党）がホワイトウォータ疑惑で公金詐欺罪の有罪判決を受け、辞任したため、規定に従い副大統領のマイク・ハカビー氏（共和党）が州知事職を引き継いだ。当初、ハカビー氏は今回の上院議員選に出馬する意向で準備も進めていたため、その動向が注目されたが、同氏が知事職を引き継ぐことを決めたため、ハッチンソン氏が共和党の指名を獲得することとなった。

ハッチンソン氏は、大学卒業後バプテスト派の牧師を務めた後、クリントン大統領が同州知事であった1984年から四期、同州下院議員を務め、1992年からは二期、同州選出の連邦下院議員を務めた。クリントン知事（当時）が彼のことを「ノータックスのティム」と呼んだほど、ハッチンソン氏は税制改革に熱心で、それが彼の政治目的である。

（10）選挙区改正から生き残った現職議員（下院）

最高裁判所が、いくつかの州の黒人やヒスパニックを対象にした連邦下院の選挙区分けを改正するように判決をだしたとき、それによって今回の選挙で影響を受ける現職議員が増えるだろうと考える者が多かった。

しかし、その影響をうけた四つの州では、いずれも少数民族出身の現職議員はすべて当選することができた。そして皮肉なことに、このリマップ（選挙区の線引方法を変えること）の最初の犠牲者は、新しい選挙区の線引きによって11月５日の投票で決着がつかず、12月10日の決戦投票に持ち込まれたテキサス州の２人の白人現職議員であった。

テキサス、フロリダ、ジョージア、そしてルイジアナの選挙区は、「人種を選挙区見直しの主要要因とすることは連邦憲法に違反する」という1995年と1996年の最高裁判決によって、今回新たに見直されることになった。そしてこの選挙区見直しによって、ジョージア州の旧選挙区で当選したシンシア・A・マッキニー氏（民主党）、サンフォード・D・ビショップ・ジュニア氏（民主党）ら少数民族出身の現職議員は、当該選挙区における黒人やヒスパニックが主流派から少数派へ転落することで、今回の当選は危ういと予測する者が多かった。

確かに、「この選挙区割では黒人や少数民族の候補者が当選するのは不可能だ」という議論はしにくくなった。

この選挙区変更は、選挙前にも不慮の災害を引き起こした。ルイジアナ州選出で黒人議員のクレオ・フィールズ氏（民主党）は、自分の選挙区が連邦裁判所によって、あえて黒人に不利なように書き換えられたため、三期目を狙うことをあきらめざるをえなかった。

フロリダ州では、やはり黒人議員で、二期下院議員を務めるコリーン・ブラウン氏（民主党）の所属する第三区が、黒人を主流にするための選挙区割りであるとして、1996年４月に連邦裁判所から違憲判決を下された。州議会は、黒人の人口比率を第三位まで下げる区割り変更を行ったが、それでもブラウン氏は三期目を手にすることができた。

ジョージア州の選挙区割は、州内に三つある黒人を主流派とする選挙区のうち、二つが違憲と判断されことを受けて書き換えられた。手をつけずに残された選挙区は、黒人が現職議員である。

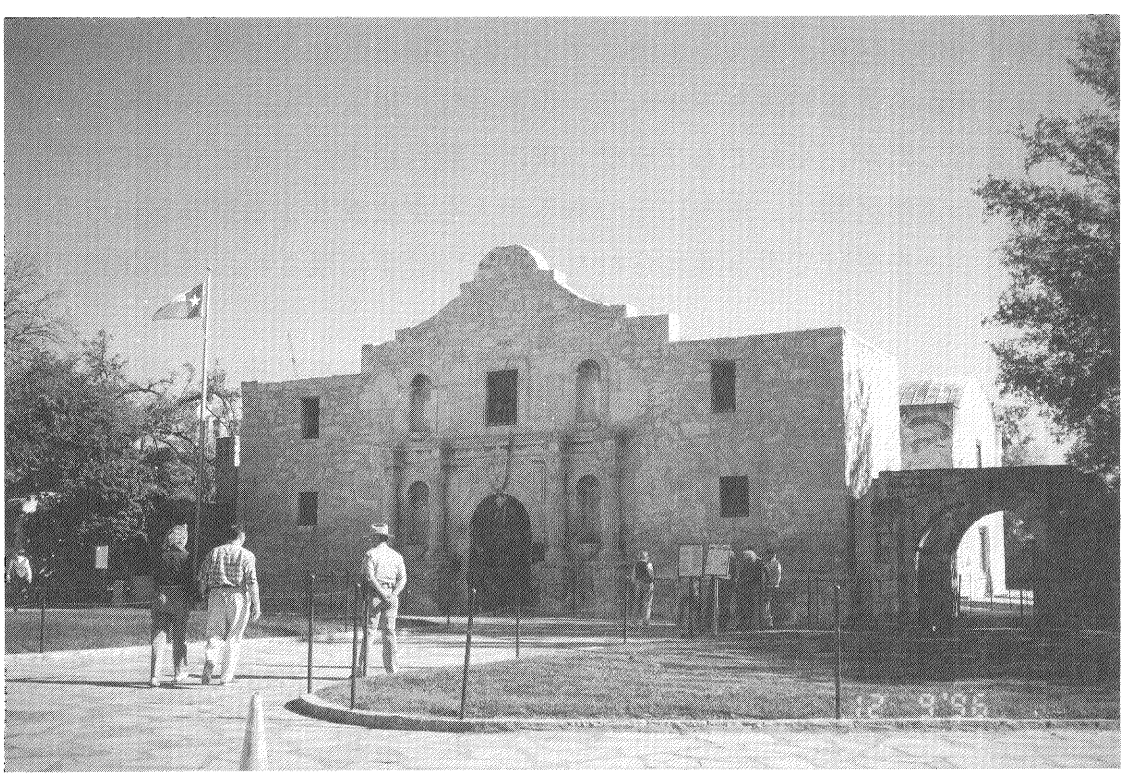
結果的に、マッキニー氏とビショップ氏は、過去２回の選挙に比べ、黒人の比率の極端に減少した選挙区から立候補することを余儀なくされた。黒人女性のマッキニー氏は、州内で最も無防備な候補と思われたが、選挙の結果、58％の得票を獲得できる有力な候補であったことがわかった。ビショップ氏も新しい選挙区で、得票数は落としたものの再選された。しかし、黒人の比率の高くなった選挙区で、共和党の現職議員を少しでも追い落とそうとした民主党の希望はかなえられず、同州では両党の現職議員全員が再選された。

（11）一部選挙区で決戦投票となったテキサス州（下院）

人種を選挙区見直しの主要要因とすることは憲法に違反する、との連邦最高裁の違憲判決を受けて、選挙区割りが変更されたテキサス州の第８区、９区、25区では、最高得票者の得票率が５割を越えず、12月10に決戦投票が行われた。

11月５日の投票結果の上位２名とその得票率は、第８区でケヴィン・ブラッディ氏(共和党）41.5%、ジーン・フォンテノット氏（共和党)38.9%、第９区で現職のスティーブ・ストックマン氏（共和党）46.4%、ニック・ランプソン氏（民主党）44.1%、第25区で現職のケン・ベンツェン氏（民主党）34%、ドーリー・マディソン・マッケナ氏17.1%であり、それぞれが決戦投票に進んだ。

結果は第８区でブラッディ氏（共和党）、第９区はランプソン氏（民主党）が現職のストックマン氏（共和党）を敗り、第25区は現職のベンツェン氏（民主党）が当選した。ただし、11月５日の党派別の得票率では、民主党対共和党で、第9区が53.5%対46.4%と民主党優位、第25区で50.9%対48.8%と、同様に民主党優位であり、予測された結果であったともいえる。

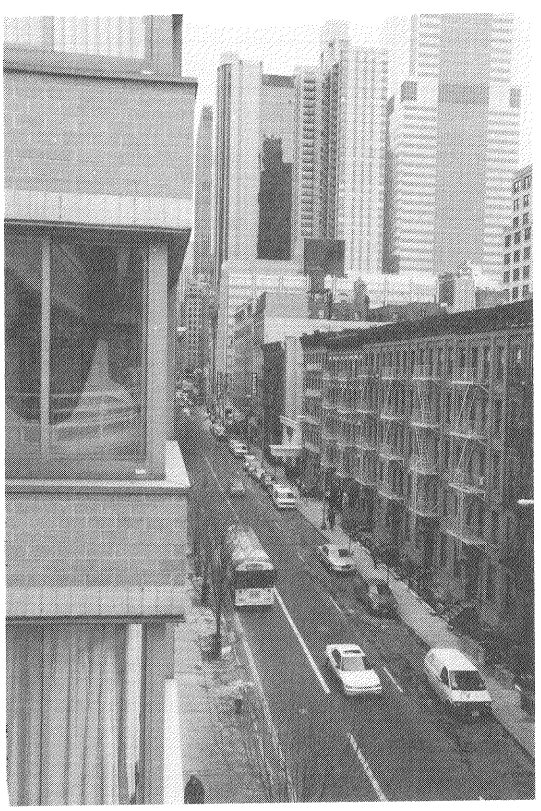


アラモ砦（テキサス州サンアントニオ）

（12）ニューヨーク州（下院）

1993年12月に、コリン・ファーガソンが９ミリ口径の半自動式小銃とダッフルバッグに詰めた弾薬を持って、マンハッタンを起点とするロングアイランド鉄道に乗り込み、通勤客６人を殺害し、19人に重傷を負わせるという悪名高い発砲事件があった。この事件で夫を失い、息子も重傷を負わされた、共和党員のキャロライン・マッカーシー氏は、爾来、銃器規制運動に自分の使命を見つけたのである。彼女の疑問は単純であった。「なぜ、普通の市民に襲撃武器が必要なのか？」、「なぜ、銃器はいともたやすく手にはいるのか？」。彼女には如才のなさがなく、非常に真面目であったことから、その訴えは多くの人々の共鳴を得た。そして、全米ライフル連盟の支援を受ける現職下院議員のダニエル・フライサ氏（共和党）が、19種類の襲撃武器の使用を禁止した法案の廃止に賛成投票をしたことに対して、共和党の寄付金集めの集会で納得のいく回答を得られなかったため、今回の選挙で、民主党から対抗馬として立候補し、同氏を敗ることを決意した。そして彼女は、ロングアイランドで初の女性下院議員となったのである。

今回の投票で、多くの共和党員が民主党のマッカーシー氏に投票したが（クロスオーバー）、それはマッカーシー氏自身も同様である。彼女は終生の共和党員であるが、今回は民主党から立候補した。マッカーシー氏の勝利を受けて、ロングアイランド地区の共和党支部長は、２年後の選挙において、マッカーシー氏を共和党候補として登録する用意があることを表明したが、同氏は否定している。



ニューヨーク・ウエストサイド